

---

# この生徒会長キラキラしてる。

フレジェ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

この生徒会長キラキラしてる。

### 【Nコード】

N6930R

### 【作者名】

フレジェ

### 【あらすじ】

ある学校の生徒会長は、キラキラしてるモテ男野郎。いつでも娯楽を求めてはしゃいでいる。そしていつも扱き使われる副会長の女の子の、苦勞を刻んでいく高校生活。

今日も今日とてイベントの嵐。果たして彼女のイライラが治まる日は来るのであろうか……。

/無言ダンテ様主催『Smile Japan』投稿作品。ハチャ

メチャ学園コメディーを目指したつもり、でございます……。

イベントと参加者紹介のようです。

「クエス、チョン！」

直後、黄色い歓声が響き渡りました。女子限定。同時に恨めしやな視線とブーイング。男子限定。だがそんな男子は女子の視線で即沈黙。女の子の団結力って怖いですね。

「さあ今回も始まりました！ 司会はワタクシ二年B組、生徒会長の大久保吉良と！ キラッ」

黄色い歓声。

ウザい。ウザすぎる。しかも気持ち悪いくらいノリノリです。いくら名前が吉良だからってそれはない。みんな騙されてるんですよ。何でモテるんだろう。

…… おえつ、隣からキラキラした催促の視線が。ああ仕方ない。

「二年D組、副会長の花田雛でお送りします……」

「よろしくね雛ちゃん！ キラッ」

ああやめて。女の子たちの視線が辛い。

……これも仕事です。耐えるのです、私。

企画を進めるべく手元の紙に目を落とし……って何でしょうかこの文章。イラってする。変えちゃえ。

「えー、この企画は募集で集った方々でクイズ番組モドキをしないと  
言う生徒会長自ら立案した暇つぶし企画です」

隣のイケメン野郎が黒い笑顔を向けてきやがった。

「訂正します。……我らが、う、ウルワシイ会長様がご提案なされたクイズ形式の交流企画です。お越し頂いた皆様には感謝を申し上げます……」

何故。何故私がこんなことを言わねばなんのですか。

イケメン野郎はニコリと笑って、マイクを手にとって話し出しました。ちっ、様になっていやがります。

「そーいうわけでみんな！ こんな古臭い体育館に集まってくれてありがとうございます！」

再び黄色い歓声が響く。

……この歓声も爽やかキラキラ腹黒会長も、見聞きするたびにイライラします。

一方、両手両足の指の数くらいだけいる男子たちは、この雰囲気気後れしています。かわいそうに。

「じゃあ早速参加者の紹介に移ろうか！」

テンションが上がってきたのかキラキラ度を増した視線に催促され、うんざりしながらも書記と私で書いた文章を読み進めます。

「エントリーナンバー一番、前企画に引き続き参加です。漢検英検ついでにそろばん、一級取得の前生徒会長並びに前回覇者、三年C組の市川宗一さんです」

教室から運び込まれた教卓に設置された回答ボタンを弄りながら手を挙げたその人に、会長の時と負けず劣らずの歓声が上がります。

細身のインテリそうな眼鏡さんです。勤勉家で全国模試の順位が凄いと評判の方。

友人Aは「あの切れ長の瞳がステキ!」と、目を輝かせていたような。

どうでもいい。続けてしまおう。

「続きましてエントリーナンバー二番、こちらも前回に引き続き参加です。前生徒会長の幼馴染みであり永遠のライバルだと豪語する、ボクシング部前部長、三年C組の波多光司郎さんです」

「宗一には負けん! 負けんぞおーっ!」

その人は紹介直後に立ち上がってこぶしも突き上げて大声も上げてアピールしました。一つ前の歓声よりだいぶん減った女子の歓声と、数少ない男子たちの歓声があがります。

人望は厚い人だ、あの男子たちは健気にも応援に来たのですね。

友人Aは「あの逞しさと男らしさがクールだわ!」と、うっとりしていたような。

ちなみにこの人前回ビリでした。

「えー、続きましてエントリーナンバー三番、初参加になります。小柄で有名な文学部のルーキー、一年A組の瀬本真樹さんです」

「小柄は余計だよ! ま、応援よろしく!」

明るい茶髪に女の子のような名前と体躯の、れっきとした男である小柄なその人は笑顔を振りまいて言いました。

すると、甲高い女子の歓声が聞こえました。見れば一角にやたらと興奮している一団がいます。…ホントにいたんだ、ファンクラブ。友人Aは「あの生意気さと可愛らしさは罪よねえ…」と、にやけ

ていたような。

「続きましてエントリーナンバー四番、こちらも初参加です。今企画の紅一点、謎ではなくなった転校生の帰国子女、二年D組の木島亜美さんです」

「変な紹介ね…。まあいいわ、よろしくねえ」

染められた栗色のウェーブヘアにスタイルの良いその人がそう言つと、男子の野太い歓声と女子の頑張つてー、と言う普通の歓声が聞こえました。この中では一番まともでしょう。

ちなみに友人Aとは彼女のこと。結構な面食い。

紹介が終わつたあと、手元にあつた紙が隣のキラウザ会長に引つたくれました。発言したいみたいです。

「ではルールを説明するよ。このクイズは早押し形式だ。問題文を読んでいる途中でも答えがわかったら、手元のボタンを押して回答してもらつ」

ちなみに問題文は私が読みます。こいつ向きではありませんので。

「ただしっ！ キラッ、ボタンを押してから回答時間は五秒のみ！ 答えなかったり間違えたりしたら次の人が答えるまで回答権は与えられない。ただ、その人が答えられなければ、次からは早押しに参加していいことになっている」

連続回答が駄目なだけで、実にシンプルなルールです。

「みんなの頑張りに期待しているぜ！      キラッ」

さあ、下らない祭りの始まりです。



イベントと参加者紹介のようです。(後書き)

今更ですがクイズといっても答え等間違ってるのがあるかもしれないので、鵜呑みにしないで下さいませー。

横檯の中始まったようです。

古臭さが若干目立つ体育館に、パイプ椅子と教室の教卓、マイクなどを勝手に拝借して作られた簡易的な会場。

そこでは今まさに、宴が始まるうとしていました。

「問題は雑学から学問的なものまで千差万別だ！ ランダムに出てくるので惑わされないように頑張れよ！ キラッ」

……ちつ、うざい。

横目で睨みながら問題文の束を整えます。書記の女の子と二人でせつせと作った問題です。ちなみに立案者であるこのキラウザ野郎は手伝いもしませんでした。そのくせ「正解したときのピンポンと外したときのぶつぶーと答えだけ言いたいんだけど、いいかな？ キラッ」だなんてのたまいやがったので解答だけ渡してあります。しかも「なるべく面白い問題作ってね。キラッ」だとか注文までしやがりました。

とんでもない自己中です。

「また、正解することに一ポイントが贈られる。次のチャイムが鳴るまでに多くとれた選手の勝利だ！ 準備は良いかな？」

こいつ、無駄に美声なんだよな。やっぱり軽く舌打ちして、いつでも読めるようにスタンバイします。

「では、第一問！ キラッ」

会場が静まり返り、参加者たちが緊張した様子でボタンに手を添えました。

私は小さくため息をついてから、一問目の問題文を読み始めました。

「……チョコレートのは原料は」

ピンポン！

早くもボタンを押した音が鳴りました。お馴染みの音ですね。ピカピカとランプを点灯させた席に座っていたのは、私の友人Aでもある木島亜美でした。

「カカオ豆っ！」

勝ち誇った様子でそう短く叫んだ亜美は、よっしゃ、とかなんとか呟いていました。

そんな亜美を見た会長は、バカにしたようにニコリとしてから言いました。

「ぶつぶー、残念でした不正解！ キラッ」

ええー！？という亜美のブーイングと会長に対する女子の黄色い歓声が響く中、私は最初から読み直そうとしました。一応の決まりです。

「ちょ」

ピンポン！

はやっ。回答者の席を見ると、前生徒会長の市川さんが口を開くところでした。

「バナナの葉」

簡潔にそういう市川さんに私は驚きました。隣に座る会長はおお、と驚きを露にしたあとにニッコリと笑って言います。

「正解です！ キラッ、さすが市川先輩だ！」

「そ、宗一に負けたあああつ！！ くそつ、何故だ！？ 何故バナナの皮なんだ！？」

「そーよ、何でよ！？」

「バナナの葉つばですよ、先輩方。…でも、何ですか？ 僕も知りたいなあ」

三者三様の反応を見せた回答者たちは、口々に聞いてきました。ただ、一年の瀬本さんが首をかしげて聞いたとき、観客で女子の一同が悶絶しかけていたのには目を瞑りましょう。

隣の催促するキラウザ視線を無視して私は問題文を最後まで読むことにしました。

「チヨコレートの原料はカカオ豆ですが、発酵させて実から種子であるカカオ豆を取り出す際、実を包むのに使用する葉の果物はなんでしょう？ という問題です。限られた温暖な地域でしか育たないカカオの」

また横の野郎に紙を引つたくられた。この野郎。

「カカオの木はバナナの木と生育条件が似通っているのさ！ 近場

で手に入りやすく、それに長くて大きい。独特の芳香もあって遙か古来からバナナの葉は使われているんだ。キラッ」

それだけ言って紙を捨てるように返してきやがりました。この野郎。

「そんなん分かるかあっ！ 雛ちよつとこれ、難しくない!？」

友の声ですが、無視します。

「……他にも理由がありますが省略をば」

「無視するなっ、」

「えー、見事正解しましたエントリーナンバー一番の市川さん、」

「一ポイント獲得です！ キラッ」

この野郎、人の台詞まで取りやがった。どこまでやれば気が済むんでしょうか。

それにしてもさすが前回覇者。無駄なことにも詳しいようです。確かに普通は知りません、多分。

他の方々、特に波多さんと亜美は音が聞こえてくるほどに歯軋りしたり教卓を叩いてへこませたりして、悔しさをぶちまけていました。

「ではどんどんいきましょう！ 第二問！ キラッ」

流し目で次を読めと催促するキラウザ野郎。

…ああ、怒りで手が震える。武者震いってことでしょうか。

「…法律で労働衛生法規に分類されている労働基準法ですが、一週間を通して」

ピンポン！

鳴りました。誰かと視線を動かせば、押したのはなんと瀬本さんでした。ファンクラブの方々からの悲鳴もとい歓声上がる中、あどけなさがにじみ出る顔で瀬本さんは言いました。

「四十時間！」

「正解っ！ キラッ」

「やったあ！」

なんと正解でした。

そして可愛らしく微笑んだ瀬本さんは確かに、天使でした。

……ファンクラブの方々に、ティッシュ配った方がいいですかね。おっと、隣からウザキラ光線送られる前に読んでしましましょう。

「法律で労働衛生法規に分類されている労働基準法ですが、一週間を通しての総合労働時間は何時間まででしょう？ という問題です。一週間で四十時間までなので、正解です。なのでエントリーナンバー三番の瀬本さん、」

「一ポイント獲得です！ キラッ」

確信しました。狙ってやっていやがる、こいつ。

早押しの奪い合いのようです。

「さあクイズ番組らしくなってきた！　どんどんいこう、第三問！  
キラッ」

ちっ、テンションがうなぎ登りですこいつ。ウザいです。……読  
みますからそのキラウザ視線をやめて下さい。鳥肌ものですよ。  
皆さん真剣ですし、仕方なく問題を淀みなく、聞こえやすいよう  
に読んでいきます。

「フランス語で黒」

ピンポン！

鳴りました。さてどなたでしょう。

果たして回答者は、先ほどの件で余裕は消えたものの堂々たる雰  
囲気を醸し出している亜美でした。

「ノワールよ！」

「ぶっぶー！　不正解だよー？」

「なっ！？　くうっ！」

無茶苦茶悔しそうですね、あの子。

まあ仕方ありませんか。なんせこのキラウザ会長思いつきり笑っ  
てますもん。

さて読めますか。

「フ」

ピンポン！

はやっ。どうやらまた市川さんのようですね。

「ブラン。又はブランシェ」

あちゃ。

市川さんの答えを聞き、隣のやつがどんどんと愉悦に満ちた顔になっていきました。

「ぶつぶつぶー！ 不正解でえーっす！ キラアッ」

「……」

おお。若干動揺しましたが露骨ではないですね。

それよりも隣の波多さんの方が喜んでいっているような気がします。気にせず続けましょう。

「フランス語で黒はノワールですが、ドイツ語」

ピンポン！

瀬本さんと亜美がボタンを連打しました。さて、回答権を得たのはどちらでしょうか。

ランプが点灯します。

「やったわ！ シュバルツよ！」



亜美でした。瀬本さんは涙を浮かべて可愛らしく悔しそうにしています。…一部、椅子が赤くなってしまっている……。

「ぴんぽーん！ 正解です。キラッ」

「フランス語で黒はノワールですが、ドイツ語で黒はなんと言つてしょう？ という問題です。ブランは白ですね。というわけでエントリーナンバー四番の木島さん、」

「一ポイント獲得です！ キラッ」

マンネリ化してるし。ええい、もう気にしない。

「続いて第四問！ いくよ、キラッ」

本当にみんな真剣になっています。あの市川さんでさえさっきよりも集中しています。悔しかったんでしょうか。

「小さい柴犬の」

ピンポン！

今度は全員連打しました。さて、今度はどなたでしょうか。ランプが点灯します。

「勝ったあっ！！」

叫んだのは波多さんです。叫ぶのと同時に立ち上がり、お隣の市川さんに人指し指を突きつけました。

「これで宗一に勝ったぞおおっ!!」

初めての見せ場です、よほど嬉しかったのでしょう。生き生きしまくっています。指差された市川さんは完全に無視していますが。

「ふっふっふ、答えは……。あれ、ねえ問題なんだっけ、」

ビーツ。

「はい残ねーん、時間切れです。んじゃ雛ちゃんよろしくね！キラッ」

「えっ、そんな」

「……ちい」

ピンポン！

あわれにもうなだれている波多さんを無視し、素早くボタンを押したのは市川さんでした。

「豆柴」

だと思いました。

「ぶつぶー！　ぶつぶつぶー！　不正解ですよキラアッ」

「……っ！」

あっ、拳を握りしめた。あそこまで悔しそうな市川さんは初めて

見ました。まあこのキラウザ野郎は市川さんを憧れの視線と同時にライバル視していましたからね。

波多さんほどではありませんが。

「小さ」

ピンポン！

皆さん実に速攻でよろしいです。

今度は瀬本さんですか。ファンクラブの方々がもはや騒音です。

「わかったよ、豆知識だ！」

真剣な顔で言い放った瀬本さんは、時が経つと同時に不安になってきたのか怯えているような表情になっていました。

……鼻血のアーチを初めて見ました。いくらなんでもやりすぎだと思います。ファンクラブ怖い。

「ぶつぶー、残念不正解です」

「えっ！？」

興味無さげに不正解を言い渡したキラウザ野郎は、本当に興味がないようです。

戸惑いの声をあげた瀬本さんは瞳を潤ませて、ファンクラブの方々をノックアウトしにかかりました。

ああ、会長が興味無さげなのは間違いなく同族嫌悪のためでしょう。だって瀬本さんこいつと同じ臭いがしますもの。最初はノリノリだったのにね。

まあいいです、読みますか。この問題ならおそらく最後まで読め

るでしょう。

「小さい柴犬のことを豆柴と呼びますが、」

警戒してか、まだ誰も押してきません。間違えたため連続回答の出来ない瀬本さんは俯いて悲劇のヒロイン化してますが。ああ叫ぶなファンクラブ。

「豆柴と豆を掛けて作られたキャラクターの、『豆しば』の内の一体である『大豆しば』は、何オタクでしょう?。」

「……?」

「は?」

「え?」

「あ、僕知ってます。悔しいなあ……」

おや、瀬本さんは知っているようです。驚きですね。

一方回答者である市川さんは考え込み、波多さんは意外にも考え込み、亜美はボタンを押そうか迷っています。

ピンポン!

押しましたね。

「さあ答えはなんだい? キラッ」

こいつ今更でしゃばってきやがった!

気づけば会場はある一団からつめき声が聞こえるだけで静かです。  
少し緊張しながら亜美は答えを口にしました。

「……えと、アニメオタク？」

「ぶー、不正解。…キラン」

テンション下がったじゃないですか。

テンションはバカに左右されるようです。

ピンポン！

おや、このテンションの下がった会場でボタンを押した猛者はどなたでしょうか。

「えと…」

なんと、瀬本さんでした。そういえばさっき知ってるだと言っていましたね。

それでもこのテンションだだ下がりの中ではしり込みしてしまうようです。発言するのを戸惑うように視線をそわそわさせる瀬本さんは、頬をリンゴ色に染めていらっしやり、どこかの女の子達は鼻からトマトジュースを絞り出していました。

「はい残りさん、にーい、いーち、」

肘をつき、つまらなそうな声音でカウントダウンを始めた会長に焦ったのでしょ、瀬本さんは慌てたように言いました。

「わわっ、け、健康オタクでしょ？」

「……せいかーい。キラーン」

とことんテンション下がってますね。こういうときにこそ上げて欲しいものです。

さて、この問題の問題文は全部読みましたし、繰り返し読まなくてもいいですね。

「『大豆しば』は健康に気を使いすぎる健康オタク、正解です。というわけでエントリーナンバー三番の瀬本さん、……。一ポイント獲得です」

台詞を取るのならとことんやって欲しいですね。

その所為か歓声も弱まっており、狂喜狂乱している一部の女子を除いて滑ってしまった展開に観客が楽しめていないようです。……仕方ない。気持ち悪いのですが我慢して、隣のだらけモードに移行しそうな会長に耳打ちをします。

こんなんでも生徒会が直々に開催したイベント。生徒が不満を漏らせば信頼がた落ちになってしまいます。それだけは防がねば。

「会長。もう少し覇気を出して盛り上げてください。これでは交流もクソもないです」

そう言いながら嫌々顔を近づけると、爽やかな柑橘系の香水を使っていたようでほのかに香りました。

見た目的にはお似合いですね。あくまで、見た目的には。

「んう？ そうは言っても雛ちゃん、なーんか乗らないんだよね。いつもの市川先輩の独走状態ならまだしも、なんでかあの猫かぶりっ子がリードしちゃってるしー。キラッ、ちよつとつまんだよねー」

女子高生かおんどらあ。猫かぶりはあんたもだろうが。

しかし確かに珍しい。いつもトップで走り抜ける市川さんが序盤とは言え、いまだ一ポイントとは。亜美も一ポイントですが、瀬本さんは今ので二ポイント獲得しています。書記の子が「宗様が分かりにくい問題作ってみよー！ 雛先輩協力してえ」とか言つてノリ

ノリだったからでしょうか。

だからと言ってこのまま続けるわけにはいきません。

「会長、我が儘言っていないで盛り上げなさい。…お姉さんに言いつけますよ」

「イエス、サー！」

……切り札を使ってしまった。週に一回しか使えないのに。まだ週の始め頃なのに…。

しかし背に腹は代えられません。効果は観面<sup>てきめん</sup>なのです。その証拠に会長はいつものごとくお元氣になられてマイクを強く握りしめました。効果音は雑なバイブレーションと亀裂音です。大丈夫、あのマイクは特別製です、まだ持ちます。

「ごごほんっ！ さあさあ次は第五問目だ、が！ 瀬本真樹選手は既に二ポイント獲得している！ 一方、マジ学校のトップ略してMGTこと市川宗一選手は何とまだに一ポイントオ！ どうしたどうした前生徒会長！？ 初の黒星いつちゃうかぁー！？ はたまたマジ自称マドンナ略してMZZMこと木島亜美選手がここで追い上げを見せるかぁー！？ 脳筋野郎に期待はするな！ さあ今までになり展開だ、改めて第五問！ いくぜキラアアッ」

正に生徒会長効果。いや、キラウザ効果と言うべきでしょうか。皆さんもよく盛り上がられるものですね。これはもはや騒音です。マジ観声騒音です。略す気はありません。

ついでに煽り文句もあつたお陰で選手の方々もやる気満々です。さて、このテンションを崩さぬうちに。

「剣道で使」



ピンポン！

鳴りました。おや、なんと波多さんです。ですが様子がおかしいですね、額に青筋が浮き出ていてグロテスクです。なんか悪口でも言われたんでしょうかね！。

「マジ脳筋バカ略してMNBこと波多光司郎選手だあつ！ 答えは！？」

このキラウザ野郎は忠実にまだ盛り上げようとしているようです。あら、波多さんの青筋が増えていきますね。

「のっ、脳筋言うなあ！！ 気にしてんだぞ！！」

まさかのまさか、気にしていたようです。バカってところには触れないんですね。

「ここで宗一を超えて、脳筋じゃないところを証明してやるっ！！」

素晴らしくやる気満々です。それにしただって声が大きいですね。

…ちよ、盛大に吸い込んでるし。咳き込んだし。耳ふさいどこ。

「答えは、竹刀たけとうだっ！！！！」

沈黙。

声が響き渡りながらも、皆さんが沈黙しているのがよくわかります。どうしよう、折角盛り上がったのに。

そこで、珍しくひきつった顔をした会長が上擦った声で尋ねました。

「あ、す、すみません波多先輩。もっかい言ってもらえるかな？  
キ、キラッ」

「だから、たけとうだ!!」

マジですか。

調子に乗ってきたようです。

たけとう。

竹刀を高校生で、しない、ではなくたけとうと読むとは。しかも、まさか、高校三年生で。驚きの域を超えて引きますね。

「ざ、残念不正解ですよキラッ」

しかもこいつ、声がまだに上擦っています。その所為か盛り上げるのを忘れているようです。……まずいですね。またテンションただ下がり回避したいところです。

これは参加者の皆さんに賭けるしかありませんかね。

「剣道で使用する」

ピンポン！

さあ誰が救世主か。

「し、しない、竹刀よね？」

亜美でした。不安なのでしょうか、声が震えています。心配しなくても滑ってはいませんよ。

「えーと、ぶつぶー、不正解キラッ」

よし、微妙ですがこいつも持ち直してきたようです。一方、亜美は恥ずかしいのか座った状態で地団駄踏んでますね。座りながら地団駄踏む人はじめて見ました。

そしてだんだんと空気が浮わつき始めました。イベントは浮わついてこそなんぼです。テンションも上がり気味で良い兆候です。この調子で行きましょう。

「剣道で使用する防具の」

ピンポン！

鳴りました。おお、市川さんです。前に比べると随分と押すのが遅いですね。市川さんでも警戒するのでしょうか。それにしたって一問目の驚きの早さはどうした。

あら、なんだかさっきの不正解者の方々がわめいておりますね。防具ですけど、ええ何か。

「……、籠手<sup>こて</sup>」

「おおっ！ 正解です、キラッ」

何と正解。調子に戻ってきたのでしょうか、それともエスパーなんでしょうか。普通そこまで読めねえよ。

「剣道で使用する防具の一つで、手につける防具をなんと云うでしょう？ という問題です。籠手ですね、正解です。というわけでエントリーナンバー一番の市川さん、」

「一ポイント獲得ですねっ！ キラッ」

ね、をつけたか。まあいい、最初ほどでなくとも盛り上がってますし。あっ、女子の歓声も復活してるウザい。

……ふうむ、そろそろ引っかけ問題いきますか。今までも十分引

っ掛けでしたけど。ここからが本番なのです。

「さあっ、次に行くぜ！ 第六問目だっ、キラッ」

「フランス語で黒」

ピンポン！

鳴りました。しかし早いですね、流石にここで押す人がいるとは思いませんでした。読んだ部分は三問目と同じ文なんですからね。しかも亜美じゃありませんか。反射的に押したのでしょう、困惑してますね。

「……えっ？ やば、っと……。シュバルツ？」

「ぶつぶー！ ふっせいかーい！ キラッ」

「あう……。」

やっちゃまったなって言いたくなりました。訂正、言ってあげたくなりました。ああ見えて素直な子なんです。見た目女王様中身純情。これってギャップ萌え？ というのでしょうか。

「フ」

ピンポン！

はやっ。この早押しは市川さんですか。なんか懐かしい早さですね。……うわ、隣のキラウザ野郎が間違いを期待してキラキラキラしてる。キラキラはデフォルト。ああいつものことながら眩しいウ

ザい。

ですがさすが市川さんと言ったところでしょうか、悪意と期待半々の視線をさらりと受け流して平然と答えました。

「ノワ」

なんと。

「ちっ、ぴんぽーん！ よくわかりましたね正解です、キラッ」

本当によくわかりましたね、調子が戻ってきたんでしょうか。にしたって早いです。舌打ちにはあえて触れません。ウザい。

「フランス語で黒はノワールですが、フランス語でナッツや木の実のことを何と言うでしょう？ という問題です。ナッツはノワ、正解です。なので、」

「エントリーナンバー一番の市川先輩、一ポイント獲得です！ これで三ポイントめだぜ、キラアッ」

こいつ！

調子に乗ってきたようです。（後書き）

剣道のとき、ちょっぴりかじっただけでよく知らないんで・・・。  
籠手で合ってます？

ちなみに実はたけとうって自信満々に問題集に書いたの、中学生の  
ときだったり。

フレジェは大いに笑われました。以後、気をつけているのです・・・。  
。

独走状態のようです。

テンションに大いに乗ってきやがったキラウザ野郎が、調子に乗りまくりなウザい空気になってきました。

……まあ、さっきより状態は良くなったので良しとしましょう。ちっ。

「市川先輩が瀬本選手よりも一ポイントリードしてるぜ！ さあぶっちぎるのかどうなのか！ 重要点になりそうな第七問、行くぜキラアッ」

ああウザいわめくなマジ畜生。こちらら奥の手まで使ったというのに、なんでしょうかこの無駄使い感は。

…ああああ耳が裂ける。このまるで新聞紙でも大勢で一斉に破いてるかのような女子の歓声も男子の波多さん応援団も一部女子の発狂的ファンクラブも実に元氣三百倍でよろしくねえよ。うるさいウザいやかましいの三コンボです。正直個人的に是非市川先輩と亜美に頑張ってもらいたい。人間的にマシな人頑張って。

「青森県のマスコットの一つで、特さ」

ピンポン！

鳴りました。問題文遮られずに最後まで言い切るってやっぱりないですかそうですか。てか市川さんでした。今までもこれから私はこの人に敵いそうにありません。

「…りんごちゃん」



なんだか可愛いな。

「ぴーんぼーん正解です！ 市川先輩可愛いなー、キラッ、ひい」

あつ、睨まれてる。市川先輩の眼力恐ろしいですね。いいぞもつとやれ。

「青森県のマスコットの一つで、特産品である果物を模したマスコットの名前はなんでしょう？ という問題です。りんごちゃん可愛いですよ、正解です。」

「というわけでエントリーナンバー一番の市川先輩、一ポイント獲得です！ キラッ」

もう気にしないことにしました。そうさ、今までだってこうだったじゃないか…。心の汗が目には浮かぶ…。

市川さんの活躍に会場のイケメン目当ての彼女らは沸き、落ち着いたいつもの雰囲気になり調子を取り戻した市川さんは煩わしそうに黙るのみです。隣のゼロポイントの巨体は憎憎しげに市川さんを見つめ、瀬本さんは頑張るぞーアピールでファンクラブを悩殺し、亜美はもはや疲れ始めている雰囲気ですね。私も疲れました、本当に疲れました。

「市川先輩がついに独走モードに入ったあ！ 瀬本選手との差をぐんぐん広げてるぜキラッ」

…まあ、予想は出来ていましたが、やはり市川さんがリードしていますね。そろそろ佳境でしょうか。

「若干予想はできてたけどどんどんリードしてきちゃってる市川先

輩流石だあつ！ この辺りがそろそろ佳境か？ 第八問！ キラッ」

うわあ、こいつと思考が同じとか考えたくもないです。最悪だ。厄日だ。……訂正します、毎日厄日でした。ええ現在進行形で。

「はあ……『喜劇王』でゆ」

ピンポン！

鳴りました。……おや、予想外にも波多さんですね。問題が捻りのない引っかけだらけだったので市川さんと瀬本さんと亜美は警戒して押してきませんでした。が、出番の全く無い波多さんはここぞとばかりにプッシュしてきましたね。

「勝った……！ 見たか宗一っ……！」

見事なまでの無視。て言うか早く答えてください。勝った、って気が早すぎます。前と同じパターンじゃないですか。

「この前テレビで見たからバッチリだ……！ そう、答えは」

隣で小さくカウントダウンの声が聞こえます。マイクを使ってやれ。わざとかこいつ。

でもどうやら間に合ったようです。答えは、

「チョコプリンだっ……！！」

……。

「……は？」

波多さんのその回答に思わず口を半開きにして呆けた声を出してしまいました。

会場の皆さんもしかり。

「…………え？」

隣のキラウザ生徒会長もしかり。これはこれでウザい。

「ふっふっふ、どうだ？ これには自信があるぞー！」

あらあらまあまあと棒読みで脳内で言ってから観客席の方を見てみると、皆様の呆れの表情が非常に印象的です。…………ああ、波多さんを慕ってくれている方々が失望しまくった顔で項垂れています。健気な方々でしたのに…。

「…………ぶ、ぶっぶー、不正解です…。キラン」

「な、なんだとおおおっ！！？」

いっそ肩を叩いて励ましてやりたい程の悔しがりようですが、チョコプリンはねえよチョコプリンは。どデカイ図体でなけりゃもはや可愛く見えるのではないだろうか、とすら思いましたね。

「こほん。…………き」

ピンポン！

きたー。市川さんです。相変わらず過ぎる早押しですね、何故わかる。

「無声映画」

いや、よく考えればこの問題はこの人にとっては簡単すぎたのかもしれない。

「正解です！ もうなにも言うまいキラッ」

こいつにしてはその通りだ。

「『喜劇王』で有名なチャップリンの映画は、いわゆるなに映画でしょう？ という問題です。ええはい無声映画ですね、正解ですよ」

「よってエントリーナンバー一番の市川選手、一ポイント獲得だあ！ これで五ポイントめ、本当もう流石としか言いようがないぜ！ キラアッ」

うつむ、眼鏡だからなのでしょううか。

独走状態のようです。(後書き)

ちなみに「りんごちゃん」は今、フレジエの携帯ストラップとなつて揺れております。

でも買ったのは二年ほど前なので今でもちゃんと人気を誇っているのかどうか…。もしもうなかったらごめんなさい。りんごちゃん可愛い。

……あれ、チャップリン合ってますよね？ 無声映画。合ってますっけ……？

鐘が鳴ったようです。

市川さんが連続で正解し、観客が沸き立つ中それを煽ろうとキラッキラしながらウザい生徒会長は声を張り上げました。諦めないで言います、うるさいですね。そしてウザいですね。

「さあさあ続いては」

しかしそのとき、学校特有のどこか古臭いくせによく響く鐘の音が鳴りました。

……やれやれやっと終わりですか。でも結構短かったような、それはそれでとても良かった。ありがとう鐘。ありがとうチャイム。ありがとうキンコンカンコン。

「おおっと、時間切れだ。勝敗は決した、結果発表に移るぜ。キラッ」

盛り上がり足りないようで、少しだけ不服そうな声をしながらもそう宣言したキラウザ野郎は相変わらずのきらめきです。歓声マジウゼエ。

とにもかくにも、結果発表要りますかね。一目瞭然の気がしてならないのですが。一位の人は決まったも同然なのですし。…でも毎度恒例でもあるのですよね。ちっしかたねえ。

……あっしかもこいつ、あとのこと私に任せる気だ、流し目送つてきやがりました、うおえ。さっさと読んで終わらせよう。

「……まず第三位、一ポイント獲得。エントリーナンバー四番、謎ではなくなった自称マドンナ転校生、木島亜美さんです」

「キラッ、はい拍手ー！」

わー、と雰囲気には浮かされた拍手が上がりました。頬杖をついていた亜美はビクツとしてからあははー、ときこちなく手を振っています。あの様子では途中から面倒くさくなっていたに違いありません。初参加でしたから、これが最初で最後の参加になるでしょう。

「続いて第二位、二ポイント獲得。エントリーナンバー三番、可愛らしすぎる文学少年かつこはてなかつことじ、瀬本真紀さんです」

キヤー、というのは凶器になりますので皆様お静かに。本当頼みますから。しかし本人は涼しい顔で、訂正します、ほんのり頬を赤らめて嬉しそうな顔をして手を振ってそれに答えていました。でも瀬本さん、一瞬微妙に顔しかめたでしょう。私の眼鏡はごまかせませんよ、猫かぶり第二号め。

耳を塞ぎながらちらと隣を見てみると、隣の野郎ですら顔をしかめています。今更ですがそれも絵になってしまうので引き裂きたい是非に。

「そして栄えある…？ 第一位、」

素ではてなをつけてしまいました。とそこまで読んだとき、最初のように隣のキラウザ生徒会長に手元の紙をひったくられました。ええ口上はもう考えてありましたので読むだけでオーケーです。三人分は。

「キラキラーン！ 五ポイント獲得！ エントリーナンバー一番、元生徒会長のチート野郎こと、市川宗一だああっ！ キラッ」

あっこいつ台詞変えやがったと思う暇もなくイケメン狙いの女子

のキャー。ファンクラブも相当ですがこちらの方が数が多いのでした。……全くもう、まあその気持ちはわかるわけがねえよ。叫ぶよりもすまし顔でプッシュボタンをいじる市川さんの隣で怒りと敗北感に震えている巨体を慰めて上げなさい。

「なんと言おうと当然の結果だったけど、八問という問題の少なさでよくここまで熱狂できたと思う！ 何より面白かったぜキラッ」

こいつはしっかり楽しんだようですね。早く終わってくれてほっとはしていますが、折角あれだけ問題を作ったのにもったいない気がします。どうせまた似非クイズ番組はまたやるだろうからとおきますが。

「では教師が来る前に片付けえっ！ みんなよろしくねキラッ」

せこい！



鐘が鳴ったようです。（後書き）

似非クイズ番組終了です。なんだかやたらと時間をかけたような。そんなに書いてないのに。

ちなみにここで切り上げたのはクイズが思いつかなかったからというのがあります。今思えばことわざ入れればよかった……。

次、違うイベントやらかします。体育会系にする予定。

不憫な高校のようです。

似非クイズ番組を開催した二日後。それは、秋の香りが漂い始めた時期でした。

そして今この学校で、面倒事というのは、私にとって避けられないものだったのです。今更ですが。

+ \* \* +

少し偏差値が高めの都立継波<sup>つぎなみ</sup>高校では、普通の授業が行われ、普通じゃない生徒会役員がはっちゃけると言う普通の高校にはない異常さをふんだんに発揮している可哀想な高校です。

この高校に配属された堅物な教師は、大抵の方が転属の時には涙を流し、いつの間にか頭を灰色か白に染めて去っていきます。気のいい熱血系だったりてきとーな性格の、生徒に気に入られる類の教師は楽しむ方もいらっしやるようなのですが。

その原因はここ数年の生徒会長又は生徒会役員は最低一人、似たような価値観と同じテンションと似たような容姿と同じ苗字の人が必ずいるからなのです。子沢山のようです畜生。

「ひなー、次体育だつて。着替えちゃいましょ」

友人Aがやってきたようです。私にとって変人ではない大事な友人です。同じクラスでありがとう。

…まあ、なんだかんだありつつも授業妨害はあまりありませんし、イベントが盛んにあるせいか高校の知名度も上がってきています。偏差値が高めにしては面白い高校だという生徒がここ数年で増え、被害を受けるのは過ぎた行動だと何度宥めても聞いてくれない生徒

のトップに対するなんかもうやってられるかと屋台で酒をがぶ飲みしている先生を……話が逸れました。

「亜美。今行きます」

「あ、そういや今日合同授業なんだってー。体育祭の練習らしいわよ」

「…合同？」

被害を受けるのは教師だけでなく、生徒にも少なからずいるのです。実は細かいことが苦手な今期生徒会長は、その筆頭である生徒会役員をこき使うのです。特に仕事を一緒にやることが多い、副会長を中心に。

全くとんだ極悪人ですよ。

「それはつまりB組とも……？」

「ドントマインド」

しかももう一人の副会長はなんと引きこもりになりました。選挙終わったばかりだろうがよこん畜生。

と言う気分で着替えて校庭へ行くと。

「宗——いい——！ 勝負するぞおおお——！」

「……」

「負けるかあああ——！」

なんと、ウォーミングアップなのか軽く校庭を回っている集団の中でひとり、前生徒会長である市川宗一さんの自称ライバルである波多光司郎さんが全速力で何週も走っていました。

「ははははは！！ どうした宗一！！怖気づいたかははははは」

「……」

驚くほど完璧な無視ですね。だからでしょうか、一人で何週もしている波多さんにどこか生ぬるい視線が注がれているのは。

それにしたってまさか、全校合同だったとは。つまりは三年も一年も一緒ですよ…。

「あら、可愛い子が来たわよ」

そう言ってニヤニヤしながら亜美は昇降口の方を見やりました。

私も視線を追って見たのですが、なるほど。確かに可愛い子でした。ええそれはもう、体育着の可愛い男の子に年齢問わずの女の子達が大層興奮しています。…いや、流石にちょっとやばいのは。おいおいあなた保健室の先生でしょう、保健室で待機していて下さいよ。いやいや給食のおばちゃんちよっと待て！

「相変わらずきゃいきゃいしてるわねー、この学校大丈夫なの？」

ごもつともです。でもそれを言うと私まで不安になるので、ひっそりと得た情報でも開示しておきましょうか。

「確かに三年女子の三分の二はファンクラブ会員ですが、二年と一年は会長と市川さんに寄り気味なのでギリ調和は保たれています」

「…雛。あなたってやっぱり苦労性なのね…」

「…わかってはいました」

転校生で更に帰国子女である亜美はとてつもない面食いではありませんが、眼福だとしか言わないしどうやら本命がいるらしく狂っていない貴重な友人です。実に貴重な友人です。癒しといっても過言ではありません。

と、その時一年生のグループの中から小柄な影が走ってきました。

「雛先輩ー！」

その少女はボブカットで明るくい人畜無害そうな面持ちの、小動物の血肉を喰らい毛皮を幾重にもかぶった、私の生徒会の後輩でした。

「あら、憲子ちゃんだったけ？」

「…ああ、そういうあなたは自称マドンナかつこ笑かつことじの木島亜美先輩ではないですか。私の雛先輩に何の用ですかっ」

「……」

私に腕を絡めてきた生徒会メンバーの書記である滋野憲子しのは、正直に言いますキモいです。

「相変わらず宗様のあの無視っぷりはたまらないですね！ それでね先輩、つむじえんが生徒会集合だって」

「そうですね。知らせてくれてありがとうございます」

「えへ、早く行きましょうよー！ 今日こそはあの罵詈雑言聞かせてくださいっ」

「では亜美、また後ほど」

「…あ、うん。気をしっかりね…」

気を保つのは得意なので安心してください。とりあえずその視線をやめて、涙ぐまないで。こんなのは序の口ですよ。なにせ私が最も迷惑がるのはこの子ではないのですから。

「あ、雛ちゃん！ キラッ」

ほら来た。

不憫な高校のようです。（後書き）

ちなみに継波なんて名前の高校は多分存在しません。ぱっと思いつきの名前ですので、ネット検索しても確か出てこなかったしきっと大丈夫でしょう。

そして「かけっこ鬼ごっこ」編、書記ののりこちゃん新登場です。これからも副会長をどんどん不憫にしていきます。学校含め。

## 変人揃いのようです。（前書き）

ここで注意！

作者であるフレジエは普通高校じゃない高校なので、生徒会がどういうものかほとんど知りません。いやいやそれは、と思うこともあ  
るでしょうがそんなときはそつと教えてくださいます。つ  
か今更じゃねとか言わないで…。

ではどうぞ、雛ちゃんの不憫と心労の数々に笑ってやってください。



変人揃いのようです。

後輩に引つ張られて行つた先には、サボり率の高いと評判の生徒会メンバーが揃っていました。

ああ、思わずため息が……。感嘆ではありません。

ちなみにそこにいるのは会計の二年生が一人と、書記は今まさに私を引つ張っている一年生と他二年生が一人、副会長の私と生徒会長のみと言う出席率の悪さです。計五人ですね。他の学校ってどうなんでしょうね。

「雛ちゃん、遅いじゃないか。どうしたんだいキラッ」

しかし、逆にこれだけの人数が生徒会に残っているという方が奇特なのかもしれません。この生徒会に留まり、真剣に生徒会業務がしたいと思うのなら忍耐力が必須です。業務を放棄した人たちに、それが足りなかったのでしょうか。とは言うもののその方達は正常だと思います、私もですが。

「ひーなーちゃん、キラッ。無視はいけないなあ」

生徒会をボイコット、つまり無断欠席をした人たちが正常だというのなら、無論この生徒会メンバーは私を除いて全員が正常ではありません。奇人変人揃いです。自分で言うのもなんですが、私はこの生徒会の最後の良心だと思っています。なんと言おうと私は正常ですから。

「あれ、ねえねえもしかして見惚れてる？ キラッ、ねえねえキラッ」

「……会長、そんなことは万に一つも有り得ないので黙ってもらえませんか」

私が気張らなければならないのです。だって語尾に一々キラキラつけてなおキラキラオーラを振りまいている、見てくれはアイドル並み又は以上で楽しむことにしか頭が働かないやつに生徒会を任せるわけにはいけないのですから…。

そんな決意を自分の心の中で固めていると、変に勘違いして更に嫉妬なんぞしやがった後輩で書記の一年、滋田憲子が声を張り上げました。

「ぶー、この自意識過剰キラリンM野郎め！ つむじえん、何の話なの！？」

「お、おお。滋田は元気だなはっはっは」

所在なさげに突っ立っていたこの場で唯一の教師が、晴れ渡った空に軽く飛んでいってしまいそんな笑い声を上げました。正直この教師、あんまり好きではありません。

名は旋風隆志<sup>つむじたかし</sup>。細マツチヨですがキノコな頭と黄ばんだ歯のせいで人気のない教育指導兼現国教師で、教育指導になった途端これ幸いと生徒会に関わり、会長との親交を深めあわよくば生徒の人気を得ようと画策している方です。人気がないのは自覚しているようで、頑張っているのですが会長のいい力モとなっています。利用されるよ先生。同情はしませんが。

ちなみにつむじえんというのは会長がつけたあだ名で、これで皆との距離が近くなったそうです。いや、それ侮られていますから。

「それでだな、ただ開会式と閉会式の練習だけでは時間がもつたないの、早めに終わらせて種目別に競技練習をしないかってこと

になったんだ。なあ大久保？」

「流石先生、その通りです。キラッ」

一体何を企んでいるのか。このウザいことこの上なくイベントと問題ばかりやらかす生徒会長が真面目に練習などするはずがありません。ええい、確かに勉強は出来ますが全然真面目じゃないですよこの生徒会長！ つむじえん気づけ、いのように動かされてることを！

なんて考えていると、そつと肩の上に手が置かれました。…いやよくあることなんですけどね。うんざりしながら振り返るしかないんですよ。ということで振り返ってみます。

「花田さん、難しい顔しないで」

「新見さん…」

そこには予想通り、会長と同じ二年B組の生徒会書記、新見藤樹あらみつぎさんが全てを抱擁するかのような微笑で私の肩を叩いていました。

「吉良会長に任せれば、何でも上手くいくよ」

「……」

全く私の考えていたことと一致しません。すると新見さんは頬を上気させて興奮したように口を開きます。うつわ男が頬染めんな気持ち悪い、全然可愛くありません。許されるのは瀬本さんまでです。しかしやはり、こいつ…！

「いいかい、吉良会長は深く物事を考えておられるんだ。生徒の交

流を盛んに行われ、生徒も皆吉良会長のなされることを楽しんで心待ちにしている。今回だって生徒のため、しかも教師にまで思慮なされ、活動しておられる。皆が無意味な時間を過ごしてしまわないようにと効率のよい練習法を考え、実行していらっしゃるんだ。ご無理をなされないか心配ではあるけど、かの崇高なご頭脳ならいつものようにきつと何でも成し遂げてしまわれるだろう。だから花田さんはいつもどおり、吉良会長のサポートをして差し上げて。吉良会長は君を気に入られているんだから、君は無理をしない程度の活動をして、後は吉良会長に委ねればいいんだよ」

「……ええ、はい。ありが、とうござつす」

「ござつすってなんでしょね。幸い新見さんは気にしなかったようです。というかいつもなんですけどこれだけは言いたい、是非に誰が委ねるか。」

「…まあ言いませんけどね。この人純情で変に信じ込みやすいから。でもここまですぐとただの変人なんですけど…」。

変人揃いのようです。(後書き)

五人て少ない？ と私的には思うのですが、どうなのでしょう。

さて新キャラだ、捨てキャラは出来れば作りたくないのですがまだあと一人会計が残っている…！

忘れていたようです。

いまだにうつとりしている新見さんから、私は早々に目を逸らすことにしました。だって気持ち悪い。世の赤面系男子に申し訳ないのですが、せめて瀬本さんレベルとまでは言いませんから……。ああ、新見さんも非常にもつたいない。色々とハイスペックな人なのに、会長に心酔してしまったばかりに……。とことんキラウザな会長つてもう本当なんでこんなに罪作りなんでしょう。大久保家め。

といった風にちよつと憐れみを含ませた視線で新見さんを横目で見てみると、つむじえんがべちんと手を叩いて皆の注目を集めました。私も痛そうな音に反応して目を向けると、どうやら叩き方を誤ったようです、手のひらをさすりながら言いました。

「じゃ、じゃあみんな、そろそろ校庭の方に行こうか。今頃は整列も終わっているだろうから……。な、なあ大久保？」

「ええ、僕もそう思います、キラッ」

一々同意を求めているところを見ると、実に小物臭がしますね。あつ今こいつニヤつてした！ つむじえんのこと嘲笑ってますよ！ 流石に可哀想に思えてきました……。

というわけで生徒会員五名とおまけのつむじえんでぞろりと校庭へ向かいます。って言ってもすぐ近くなんですけどね。表記しませんでしたけど昇降口あたりでしたからね。先頭歩いているのは会長なんですけどね。二歩ほど下がって歩いているのがつむじえんで、つむじえんより半歩先に歩きつつ、つむじえんに対して殺気だか嫉妬だかを放ちながら会長へうつとりと光線を送っているのが新見さんなんですけどね。私はきっちり距離を取りながら後輩がくつついているが故に重い右腕を気にしながら歩いてますけどね。その更に後ろ

にちょっと忘れかけていた五人目が歩いてますけどね。

そうだよあいつだよ。自分の言葉で思い出されたので、そつと振り返ってみます。ああ、まず視界に入ったのは、ハンバーガーの包み紙が溢れ出る、体操服のポケットが……。と同時に楽しげな声。

「パラッタッラッパー、あいむらーびいーとう」

もう慣れきったことではありますが、イトですか。イトトじゃないんですか。心の中の疑問です。

「ばーがいーとう」

ああそうですか。はいそうですか。黙って食ってる。

はい、ここでこいつはデブだと思った方、貴方はとても正常です。実はこの、生徒会会計の二年A組中野秋斗は、ひよろりとノッポな童顔です。噂では体脂肪率は五パーセントを切っているとかなんとか。また、ハンバーガー至上主義で、朝唯一摂取する野菜ジュース以外は全てハンバーガーという生活習慣病の肥満を心配されるはずの人です。一体どんな化学反応が起こっているのか甚だ不明ですが、そして学校中の女子からは恨めしげな視線が送られています。しかも身長は高校生、というか日本人にあるまじき百九十センチ越え。なのに顔は瀬本さん程とは言いませんが高校一年生か中学三年生くらいに見える微妙な童顔の持ち主です。またまたいつもぼんやりしていて有名なCMソングを口ずさんでいる……。と言ってもいいものか……。

「あいむらーびばーちゅ」

バーガと言いたかったようですが噛んでしまったようです。

ええはい、中野さんに会う度思いますが、なんで生徒会にいるの

…？ 心からの疑問です。あとどうやって脂肪を燃焼しているんでしょう。私の脂肪も燃焼してくれると嬉しいのですが。



忘れていたようです。（後書き）

ようやくと生徒会全員集合！。彼、最初はデブキャラの予定でした。  
はは。

今更ですが「かけっこ鬼ごっこ」篇が終わったらもう一遍やって終了します。……こ、今年中には終わるんじゃないかな…？

今年中には全ての人が一時でもいいので笑顔になれていますように！

## 面倒事のようにです。

ぞろりぞろりと奇人変人の塊である一団は、ようやく校庭が見渡せる場所に着きました。…一応念のため最重要事項なので断っておきますが、私は奇人変人の中には当然含まれていませんよ。この花田雛、親からもらった立派な名と体を、畜生道に身を墮としてなるものですか。

……ええはい現実逃避ですが何か。

「こつ、こらーお前たち！ 整列しなさい！」

げっ、つむじえんが来たー、きゃー吉良様ー、とか聞こえますがほぼ全員居る教師でも何故治められないのか。校庭に集まった生徒たちは整列なんて全くしていませんでした。まあ予想はしていましたがどね。

教師の何人かは懸命に声を上げたりしていますがそれ以外の教師は少しおざなりですね情けない。その頑張っている何人かの何人かはあらまあ頭部が真っ白ですね。

なんとか整列しかけている列はまばらにあるものの、騒がしい生徒の方が圧倒的に多いですね。それにしてもせめてお喋りだけに高じていればまだ可愛いものを、走り回って遊んでいる生徒までいるではないですか。……ふむ、場所と雰囲気的に、どうやら一年のようですね。

ちなみに生徒会の面々はほとんど動いていません。……え、私ですか？ 私一人が行ってどうなるってんですか、事態の收拾は教師にお任せしますよ。無理そうですね。

……げっ、会長がニマニマしてる。何か企んですよこのキラウザ野郎。

「まあまあ先生。落ち着いて下さいキラッ」

「…お、おお大久保！ 何かいい考えでもあるのか？」

嫌な考えならあるでしょうよ。というかつむじえん、『お』が五つ連なってますよ。

「ここは一つ、何かイベントを催して生徒たちの気を引き、それを済ませた後にさりげなく全校練習に誘導する、というのは？」

おそらく全校練習なんてやる気ないですね。訂正します、この流れ、絶対やらないです。

「おお、いいじゃないか！ それで、どんなイベントをやるんだ？」

そう言ってしまうあたり、この人も教師向いてないですよ。しかも生徒任せですか。

「そうですね……」

会長がそう呟いて無駄に真剣な顔で悩み始めた時、校庭の方から悲鳴が聞こえました。

つてうるさい。何人も……というか何十人も、というかこの悲鳴、というか黄色い歓声、というか聞き覚えがありますよ。ああ、面倒事の気配が……。かすかに内容が聞こえてしまいました。

「ちょっとー！ 真紀ちゃんに何してるのよー！」

「そうよ、真紀君になんてことを！」

「この汚らわしい男子どもがア、こちらの瀬本真紀様に泣いて土下座して謝らんかいゴラァッ！」

「瀬本に何するの、やめなさいよ！ ……べつ別にあんたを庇ってるわけじゃないんだからねっ」

「あたしの真紀を巻き込まないでちょうだい」

「あんたどさくさに紛れて何言って……」

ああうるさい。そんな無駄な個性はいらないです。

「あれー、雛先輩、あれって『瀬本真紀ちゃんファンクラブ』の奴らですよねー？」

特に全くありがたくはないですが、いまだに私の片腕にしがみついたままである後輩の憲子がああ個性派集団について答えてくれました。この前のクイズ大会の折、ファンクラブについて調べてみたら私の脳内で関わらない方がいいグループ認定されたので、出来れば騒がないで欲しかったです。にしたって何かあったんでしょうかまったく。

「新見。調べて来てくれるかい？ キラッ、拒否権はないけど」

「喜んで！」

会長の傍に控えていた新見さんがダッシュして一年生の集団に特攻していきました。……可哀想に、が正しい見解なのかわからなくなってきました。彼の命令された時の表情、なんていい笑顔なんでしょう…。

「ただ今戻りましたっ！」

早っ。

「どうだった？」

「はっ。どうやら一年生男子が鬼ごっこをしており、調子に乗った約一名が鬼ごっこに参加していなかった一年A組の瀬本真紀に鬼を無理矢理押し付けたことによって瀬本真紀のファンクラブ会員が暴走、この騒ぎになったようです」

あの一瞬でどうやって調べた。あんた書記だろうが。関係ないか。あつ、このキラウザ野郎なんか思いつきやがったようです、笑いが悪戯小僧のそれになっています。

「よし新見。波多先輩を呼んで来い。キラッ」

「喜んでええっ！」

ああ、嫌な予感。

面倒事のようにです。(後書き)

あれ、新見君こんなキャラの予定じゃなかったのにな…。

もはやこの小説、キャラ小説と化してますよね。ふ、今更か…。

一回投稿してから会長の「キラッ」を忘れていたことに気づいて追加しました。

本気でウザく感じ始めた今日この頃。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6930r/>

---

この生徒会長キラキラしてる。

2011年8月5日04時10分発行